

ちょっとしたつながりのコミュニティと持続可能性

—サステナビリティ学における社会学的視点 (第2報) —

平松 道夫

Community with Loose-tie and Sustainability: Sociological Perspective in Sustainability Science (II)

Michio HIRAMATSU

1 はじめに

GDP (国内総生産) では中国においこされて世界第3位に転落したとはいえ、人口規模では中国の10分の1、まだまだ世界に冠たるゆたかな社会のひとつであるわが国だが、現在、じつにおおくの不安がわれわれを取りまいている。継続して安定した収入はえられるのか、年金は破綻しないのか、ねたきりや認知症になったときに人間らしく介護をうけ、最後まで看取ってもらえるのか、雇用は縮小しないのか、いじめや児童虐待が多発し、少子化が進展しているが子育てや教育の環境はどうするのか、食の安全は守られるのか、高齢化にともなう過疎化の進展により村落が消滅しないか等々。こうした不安のおおくは、経済的にゆたかであれば解決するという種類のものではなく、もっと根本的な構造の変化が影響しているとかんがえられる。これまでのように、地域の人たちなどによって相互に支えあってきた生活の仕組みが立ちゆかなくなりつつあることも、未来に対するこうした不安を感じるおおきな要因となっている。

たとえば、自動車利用を前提とした郊外の幹線道路沿いに立地する大型ショッピングセンターの進出が各地ですすんだことが一因となり、地域の日常生活を支える都市部中心市街地の商店街などが空洞化しつつある。中山間地域などでも、歩行距離に食料品店やスーパーマーケットなど日常を支える日用品の購買施設が閉店し、自動車利用がかなわないひとびとのなかには「買い物難民」といわれる人たちも出現している (佐藤他, 2011: p.vi, p.15)^{註1)}。

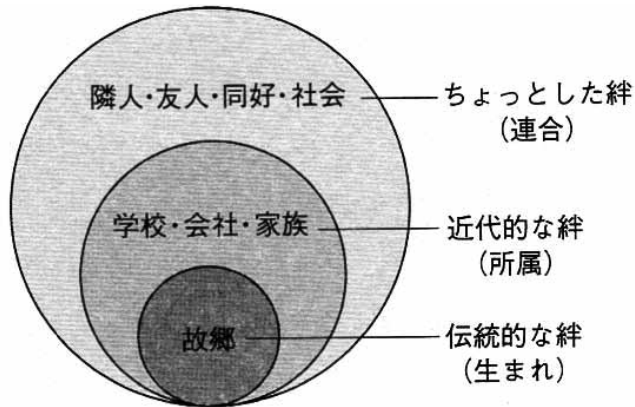
近代社会における人と人のつながりは、単なる近隣関係をつうじての相互交流のみならず、とくに日用品の売買など経済活動をとうしての交流も不可欠となっている。もちろん「金の切れ目が縁の切れ目」といった無味乾燥なつながりではなく、日常的な経済活動の場は近隣関係と重なり、公私にダイナミックに交流しあう人間関係が形成されていたのである。中心市街地の空洞化や中山間地域の過疎化は、そうしたつながりを断ちきってしまったのである。変貌しつつある社会において、安心して生活できるつながりをいかに構築し、持続可能なコミュニティ形成の端緒とすればいいのかを以下で考察した。

2 つながりの変遷

亀岡誠は、人々の「絆」の変遷について次のように説明している (亀岡, 2011: p.30)。現代人はおおむね誰でも、三つのタイプの絆の重層的な重なるなかで生きているといえる。「伝統的な絆」「近代的な絆」「ちょっとした絆」がそれぞれ (図1参照)。時代がすすむにしたがって、古い層が薄くなり新しい層が濃くなるという傾向がだれにでもみられるが、その程度は人

によって異なる。また、都市と地方でも異なるし、故郷を出てから何世代経ているかによっても異なるであろう。また、現在の年齢や境遇、ライフステージによっても異なるであろう。しかし、おおきくみると、わが国は近代化の進展のなかで「伝統的な絆」を主流とする社会から「近代的な絆」を主流とする社会へ変化してきた。

図1 絆の3層構造



(出典) 亀岡誠、現代日本人の絆、日本経済新聞出版社 (2011)、30頁。

地域の道路や水路の整備・維持管理をはじめとした地域における相互扶助は、かつては地域住民が担っていたし、戦後も高度経済成長がはじまるまでは、それらは地域住民の協働によって支えられていた。これが地域共同体とよばれる「伝統的な絆」である。しかし、高度成長の過程で地域社会が弱体化し、それらは地域住民から切りはなされ、税を徴収して行政が担うことになった (奥野他、2012、p.25)。そして人々のよりどころは学校・会社・家族といった個人を中心とした所属にかわっていった。「よい学校を出て、よい会社に入れば、よい家庭をつくれて、幸せになれる」という図式は、近代社会が手にいれた幸せモデルだったといえる。都会にでてきた労働者は、砂粒のように孤立しているのではなく、「近代的な絆」のなかに結ばれていくのである (亀岡、2011 : p.46)。

フランスの社会学者デュルケームは、近代化を、人口の集住と密度の高まり、その結果としての分業の進展、富の増大だと説明した。近代化というのは社会全体が都市のようになっていくことで、それは一種の自然過程であるとかんがえた。デュルケームは都市化がすすむ過程において、人々の精神的紐帯や道徳的規制が弱まっていくことに関心をもち、それを「アノミー」(無規範状態)とよんだ^{註2)}。デュルケームはアノミーを克服し道徳的な結合をはかる役割を国家と中間団体に期待したが、国家は道徳ではなく社会保障によって「学校・会社・家族」の幸せモデルを支えたのである (亀岡、2011 : p.44.46)。

大都市圏における人々の絆は、学校・企業・家庭のなかでもとくに企業によって維持された。終身雇用・年功序列制度といういわゆる日本型雇用形態にまもられ、減私奉公や企業一家という慣習を支える厚生福利施設や諸手当などの制度もととのっており、それがまた就学や家庭を支えていた。他方、故郷の地方と異なり、隣近所とのつきあいにわずらわされないことが都市生活の長所として歓迎され、隣人の素性すらわからないのが常態となって今日にいたった。し

かし、1990年代にはいり、バブル崩壊とグローバル化の進展にともなって国内の労働市場にも変化が生じ、企業一家のような概念はおおくの企業で崩壊した。近年、行政と民間という二分法にくわえて、地域コミュニティやNPO、企業のCRSなどの取りくみが目覚ましくなっているが、公共の志をもってサービスを提供するこれらの活動の根底には、地域社会において人と人とのつながりを再構築するという問題意識がある（奥野他、2012：pp.25-26）。それも、かつての血縁や地縁を中心とした地域共同体（＝伝統的な絆）の復活ではなく、個と個の連合を中心とする「ちょっとしたつながり」^{注3)}を主流とする社会への変化である。

都市においては、コミュニティづくりは決して容易ではない。それは、住民のおおくが他人として存在し、日々のまじわりがほとんどない場合がおおいからである。「他人に関わらない生活態度」といえるが、災害時など生活困難におちいった場合には個人の無力化が露呈する。コミュニティのなかで住民の活動を生み支えているのは、ほとんどの場合は行政ではなく、個人である。個人として自立し、かつ他の人や社会とのよい関係を結ぶことで、素晴らしい活動が展開されているのである。

ここで活動を支える個人の力を佐藤友美子らは「パーソナル・キャピタル」という概念でとらえている^{注4)}。普段はなにもないようにみえて、なにかのきっかけで顕在化するのがパーソナル・キャピタルである。物事を判断するさいのモノサシとなる価値判断能力、問題解決に必要な人とのつながり方やコミュニケーション能力、場の設定能力、交渉能力、専門家の活用能力、合意形成能力、起業化力、継続力、持続力などがそれである。「パーソナル・キャピタル」があつまり、結びつき、つながることによって相乗効果をうむ。それは「ちょっとしたつながり」をもちより、より高次元なレベルの活動をつくりあげるプロセスをさす言葉であるといえる（佐藤他、2011：p.x）。つちかわれたパーソナル・キャピタルは自立した個人が成熟社会をいきぬく基本的な知識や能力であるばかりではない。これが結ばれつながるとき、新しい地平を切りひらくおおきな力となっていく。これはさらに、一人ひとりのパーソナル・キャピタルという能力を開発し、結び、地域の力、推進力となるエンジンの役割をはたす（佐藤他、2011：p.181）。それはジンメルという「社会圏の交差」でもある^{注5)}。

人が「全面的」に協力し、一致団結する姿はたしかに美しい。しかし、それゆえにおおくの人が参加できないということもある。自分自身のなにかを捨てなければいけない事態も発生する。参加する地域住民に必要な能力は、他人まかせで全面的にしたがうのではなく、自分のなかに相手との共通の志をみだし、自分のなかにある協力できるなにかを差し出すことである。もちよった能力による協働作業で生みだした相乗効果により実際に前にすすむことである（佐藤他、2011：p.175）。都市生活を経験した者に対してプライバシーや自由を放棄させることは困難である。ゆるやかな共感による「ちょっとしたつながり」であれば、それが自分の生活にとってマイナスにならないかぎりにおいて、参加してみようという気になるものである。現代都市におけるコミュニティ再創造のきっかけはそうしたところからはじまるのではないか。

3 都市生活の魅力とちょっとしたつながり

1990年代以降、亀岡のいう「近代的な絆」のほころびがあらわれてきているが、だからといって「ちょっとした絆」がそれにかわって生活の基盤として十分機能しているという段階でもない。人々はまだ、かつて堅固であった「近代的な絆」を失っていく痛みのほうがおおく、映画『ALWAYS 三丁目の夕日』^{注6)}のヒットにもみられるように、ノスタルジックな感情にひたっているようにもおもえる。とはいえ、私たちはただバラバラになり孤立化しようとしているわ

けでもない。いままでわき役だった「ちょっとしたつながり」を主役にすえてみれば、新しい社会がみえてくるのではないだろうか(亀岡、2011:p.60)。

都市生活の魅力は、お互いのプライバシーが尊重されるとともに、街でいろいろな人と「ちょっとしたつながり」を楽しむことができるという点である。小さな町や村では、いまでもいわゆる「伝統的な絆」が生きていて、顔見知りの安心感があるが、自由やプライバシーを保つことはむずかしい。一方、郊外住宅地やニュータウンは「近代的な絆」の街である。ここではプライバシーは尊重されるが、隣人関係はあいさつ程度か、せいぜい子育て段階の限定的な範囲でしか生じないことがおおい。非常に親しい隣人ができれば、お互いの家を訪問することもあるだろうが、それは都市生活の魅力とは別物である。一歩家の外にでれば、朝夕の通勤・通学時間帯以外には、人通りがほとんどみられない街もすくなくない(亀岡、2011: pp.102-3)。

おなじ都市生活でも、いわゆる下町(ダウントウン)とよばれる成熟した都市住民の居住地域では、「伝統的な絆」で守られた町や村とは別の意味で、「ちょっとしたつながり」が街に、街路に、安心と安全をもたらしている。ジェーン・ジェイコブズが『アメリカ大都市の死と生』のなかで「インフォーマルな公共生活」とよんでいるものである。ジェイコブズはそれをつぎのように説明している。

街路に対する「信頼」は何年間にもわたって、おびただしい数にのぼる街路上のちょっとしたつきあいから形成されてくるのである。…うまくいっている街路に面した近隣住区では、そこに住む人間は根本的に断固としてプライバシーを保ちたいと思っているし、それと同時に自分たちの近隣住区の人たちとは程度の異なった交際なり、娯楽なり、助け合いを持ちたいという望みがあるが、この二者の間には驚くべきバランスが取れているのである(Jacobs、1961: 訳pp.68-9,73)。

地域住民はもちろん、店主や訪問客もそれぞれがその街を好きだとおもっているとき、変なことがおきないよう互いにさりげなく気をつかう。人の気配ほど人を安心させるものはない。人気のない公園や街路は、たとえ柵や監視カメラで守られていても不安を感じる。街なかの公園や街路で、子連れママもいれば井戸端会議をしている主婦もいる。散歩や日向ぼっこをしているお年寄りもいるし、ときには歌やダンスのレッスンをしている若者もいたりして、入れかわり立ちかわり人気のある場所はずっと安心なのである。よく利用されている公園や街路ほどゴミもあまり落ちていないという。誰かが管理しているからではなく、みんながよく使うからみんなが気をつかうのである(亀岡、2011: pp.103-4)。

ヨーロッパのおおくの都市では、中心市街地に車が排除された「歩いて楽しめる」エリアがひろがり、老若男女がつどい、ショッピングやカフェでの飲食を楽しんだり、広場にあつまること自体に楽しみをみいだしたりしている。中心市街地にはシンボリックな広場や教会、ホールなどが存在していることもおおく、快適な空間として維持されているので、観光客もそうした場所でくつろいでいる様子がみられる。コミュニティ空間としての中心市街地は、住民がいきいきとして散策できる空間として、高齢社会であらたな位置づけをえる可能性をもっているのではないだろうか。高齢者のおもな行き場所が病院の待合室となりがちな日本にくらべ、それ自体が「福祉的」であり、福祉・医療施設などをつくるよりも場合によっては重要な意味があるようにもおもえてくる。すわれる場所がおおくあり、人々がそこでくつろいだり、談笑したりしている。すわれる場所がおおくあるということは、いいかえれば都市がたんなる「通過す

るだけの空間」ではなく、そこでなにをすともなくゆっくりすごせるような場所であることを意味している。街あるいは都市が、そうしたいわば「コミュニティ空間」として存在することが大切だとおもわれる（奥野他、2012：pp.145-6. 広井、2011：pp.60,62）。近年、インフラがととのっている都市居住が大都市圏のライフスタイルとして人気がでて、都心部のマンションなどが好況であるという。中心市街地に人があつまり住むようになると、人々のあたらしいつながりもうまれて、これまでとはちがった面白味がでるのではないだろうか。

都市生活においては、情報社会のメリットをいかすことで、新しいタイプの地域社会のつながりの創造に期待がもてる。ソーシャル・メディアのひろがり、従来とはちょっとちがったコミュニティ再創造への重要な役割をはたす可能性がある。コミュニティは従来のような物理的にかざられた地域にとどまらない。そこではコミュニティづくりとして、ネットワーク社会の機能をいかし、NPOの活動や自治体の連携を活性化できる（熊谷、2011：p.215）。従来、街の活性化議論の中心は、商業との関係から論じられることがおこったが、市街地は多様な機能で構成されている。小売り機能以外にも、娯楽・業務・居住・福祉・医療・文化・教育機能等々があり、それらを支えるインフラも重要な機能であるが、都市部では比較的よく整備されている。商業という旧来の形にこだわらず、これらをいかして人があつまりたい空間にすることをかんがえるべきであろう。そこはつねに全人格的なかわりをもとめられるのではなく、地域での支えあいや共通の趣味、共同でおこすちいさな事業等々の複数のつながりをつうじて意識を共有する個人がゆるやかに結びつき、個人々が社会との「ちょっとしたつながり」を実感できる多様なコミュニティなのである（奥野他、2012：p.46）。

4 ちょっとしたつながりの展開——考察にかえて——

都市社会に生きる人々は、地理的に離れていても親族とのつながりはあるし、近隣の人々とは疎遠でも、いろいろなタイプの友人関係はゆたかである。彼らはそれなりに親密で助けあえるちょっとしたつながりでいきているのである。前田信彦は、高齢者が、子や孫、近隣住民、友人などをふくめて何人とつながりをもっているかを基準にして東京で調査をおこない、「孤立型」「伝統型」「解放型」にわけた。「孤立型」はつきあう人の数が極端にすくなく3人程度、「伝統型」と「解放型」は、つきあう人の数は14～15人程度と同じぐらいだが、「伝統型」は親族と近隣住民のつきあいがおおく、「解放型」は友人とのつきあいがおおいという結果であった。全体のうち「孤立型」と「伝統型」が4分の1ずつ、「解放型」が約半分をしめ、都市の高齢者は家族・親族や近隣住民よりも友人とのちょっとしたつながりを中心にくらす人がおおく、すべての人が孤立するわけではないということがわかった（前田、2006：pp.149-152）。

親族、隣人、友人のつながりがあって、これに「御用聞き」がくわわれば、ひとり暮らしの高齢者は幸福感にプラスして相当程度の安心感も手にいれることができる。御用聞きはかつての商店街の店主とお得意のような関係である。御用聞きはなにか品物を買えば、ちょっとした用件くらいはたのまれてくれた。うまのあう店主とお得意の関係は隣人のつながりにもなり、それが友人のつながりにまで発展して気持ちがかよいうことさえ不可能ではない。実際、パナソニックの系列販売店の中には御用聞きを復活させて成功し、家電量販店に十分対抗しているという。家電製品のセッティングだけでなく、操作の疑問にもいつでもすぐに答えてくれるし、ちょっとしたたのまれごとにも気安くこなしてくれる。かくして高齢者宅は最新の家電製品でかこまれるのである（亀岡、2011：pp.146-7）。

現在、高齢者の見守りをかねた商売としての御用聞きで、いちばん注目されているのがコン

コンビニである。24時間営業しているので夜でも照明は安心のシンボルとなり、防犯の拠点にもなっている。「こども110番」に指定されているコンビニもある。また、コンビニは物販以外にも銀行ATM機やコピー・ファックス機の設置、宅配便の受けつけ、チケット販売代行、料金振込収納代行などはもはや標準装備である。近年では、住民票交付サービス、図書館の本の取り次ぎ、冷凍総菜宅配サービス、家事代行サービスチケット販売、医療品取扱いなどもおこなっているとところもある^{注7)}。御用聞きまであと一步であるが、手間暇と人件費がかかるので、ITを利用したりボランティア団体と連携するなどの方法が模索される(亀岡、2011: pp.148-9)。

現代都市社会において、みんなで助けあいましょうというスローガンには無理がある。全員一律に助けあおうとなると、嫌だという人がでてきて当然である。向き・不向きをまず認めることが大切であり、住民はだれ彼かまわずつながることはできない。人には必ず相性があり、それがあう人はすでに何らかの活動を通じてちょっとした絆をもっている。人間同士のそうしたちょっとした絆の社会的なものをアメリカの政治学者ロバート・パットナムは「ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)」と呼び、地域が元気になる資源や仕組みとして位置づける考え方が広がってきている^{注8)}。

コミュニティ再創造は、すでに「ちょっとしたつながり」で動いている人たちをさらに取りむすび、そのネットワークを築いていくことによって、よりおおきな活動につなげていこうという試みであるといえる。佐藤友美子らのいう「パーソナル・キャピタル」的なちょっとしたつながりをパットナムがいう「ソーシャル・キャピタル」にヴァージョン・アップするためには、個別の人間関係をこえた信頼が必要である。「情けは人のためならず」とか「お互いさま」といった昔ながらの規範や絆を確立することも必要である。信頼に根づいた協調行動によって人と人との距離は縮まり、くらしや地域をゆたかにするつながりへと高まっていくのである。「近代的な絆」が希薄化しつつある現代社会において、「ちょっとしたつながり」をうまく活用して常態的なネットワーク化をはかることで、持続可能性社会の構築にむすびつけていくことができるのではないかとかんがえる。

付記：本研究は、平成22・23年度名古屋女子大学教育・基盤研究助成費を得て行った研究成果のひとつである。

<注>

- 1) 公共交通空白地帯で自動車利用がかなわない移動困難者のための公共交通機関として、コミュニティバスが各地の自治体によって運行されている。持続可能なまちづくりのためのコミュニティバス研究については文献「平松、2012b」参照。
- 2) 戦争や経済的な不況などによる急激な社会生活条件の変化によって社会的規範が崩壊して生じる欲求や行為の無規制状態を「アノミー」という。デュルケームは無規制状態における挫折感、目標喪失感などによって生じる自殺を「アノミー的自殺」と説明した。文献「Durkheim, 1895、訳1985」参照。
- 3) ここで筆者が、亀岡誠氏の「ちょっとした絆」ではなく、「ちょっとしたつながり」という言葉を用いたのは、関係の強弱を表現したかったからである。『広辞苑』などの国語辞典では「絆」も「つながり」もほぼ同じ意味であるが、筆者は「絆」の方がその関係がやや強く、「つながり」の方は関係がゆるく自由度が高いものとして用いている。
- 4) 佐藤友美子は「パーソナル・キャピタル」を次のように説明している(佐藤他、2011: p.ix)。「個人の能力が個人で完結している場合、社会に大きな活動として広がることはない。(中略)個人の能力が別の個人の能力と結びつき、つながることによって増殖し、一人ひとりの能力を足したものの以上の価値を生み出していく。そんな能力を『パーソナル・キャピタル』と意味づけたい。」

- 5) ドイツの社会学者ジンメルが著書『社会分化論』の中で、「社会圏の交差」という用語で人々のつながりの相乗効果について説明している（文献「Simmel, 1890、訳1970」参照）。
- 6) 2005年に公開された映画で、日本アカデミー賞などの各映画賞を受賞し、日本に「昭和」ブームを巻き起こすなどの社会現象にもなった。2007年に続編が、2012年に3作目が公開されている。
- 7) 最近、自治体が補助金を出すことでNPO法人が商店街に食品雑貨店を開店したり、コンビニが商店のない地方に移動販売車を巡回させるなど、「買い物難民」解消に向けての試みが実施されている（朝日新聞、2012年9月15日付朝刊）。
- 8) ソーシャル・キャピタルについては文献「Putnam, 2000、訳2006」、ソーシャル・キャピタルと持続可能なまちづくり研究については文献「平松、2012a」参照。

<文献>

- Durkheim, Émile, Les Suicide, 1895、エミール・デュルケム／宮島喬訳：自殺論、中央公論社（中公文庫、1985）。
- 平松道夫：持続可能な福祉のまちづくり——第4報：ソーシャル・キャピタル——、金城学院大学論集 社会科学編 第8巻第2号、38-44頁、金城学院大学（2012a）。
- 平松道夫：持続可能なまちづくりのための生活支援交通について、金城学院大学論集 社会科学編 第9巻第1号、1-9頁、金城学院大学（2012b）。
- 広井良典：創造的福祉社会——「成長」後の社会構想と人間・地域・価値——、筑摩書房（ちくま新書、2011）。
- Jacobs, Jane, The Death and Life of Great American Cities, 1961、ジェーン・ジェイコブズ／黒川紀章訳：アメリカ大都市の死と生、鹿島出版会（1977）。
- 亀岡誠：現代日本人の絆、日本経済新聞出版社（2011）
- 熊谷文枝：日本の地縁と地域力——遠隔ネットワークによるきずな創造のすすめ——、ミネルヴァ書房（2011）。
- 前田信彦：アクティブ・エイジングの社会学——高齢者・仕事・ネットワーク——、ミネルヴァ書房（2006）。
- 奥野信宏・栗田卓也：都市に生きる新しい公共、岩波書店（2012）。
- Putnam, Robert. D., Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community, 2000、ロバート・パットナム／柴内康文訳：孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生、柏書房（2006）。
- 佐藤友美子・土井勉・平塚伸治：つながりのコミュニティ～人と地域が「生きる」かたち、岩波書店（2011）。
- Simmel, Georg, Über Soziale Differenzierung, 1890、ゲオルグ・ジンメル／居安正訳：現代社会学体系1 社会分化論 社会学、青木書店（1970）。

